

大賞	【句】学校は 未来の扉を 探す旅 作) 梶浦 美侑 様
	<p>【講評】扉という言葉と旅という言葉を象徴的に使ったうまい一句です。多くの甲乙つけ難い優れた作品の中から、本学のテーマである「夢実現大学」に一致するというので、この作品を大賞に選定いたしました。</p> <p>目的地に着くことが人生なのではない、旅路が人生なのだ、と哲学者エマーソンは言っています。人生の旅が始まったばかりの若者には、はるかに続く道程、未来があります。私には未来がある。そう思うだけで、夢や希望が湧き、悩み、悲しみを吹き飛ばすことができます。まさに若さの特権ですね。夢と希望を持って、未来の扉を開け、進んで下さい。</p>
傑作賞	【句】心の傷も 一緒に治す 療法士 作) 吉田 倫梨 様
	<p>【講評】人間の身体は目に見える肉体、目に見えない心が一体になってできています。怪我や病気をすると心まで弱くなります。そんな時、治療にあたって下さる方々の心遣いや励ましの言葉、普段なら何とも思わないようなことに、まるで暗黒の中で光を見るように、患者は勇気付けられ、癒されます。そんな思いを持っている人が療法士を目指しているならば、とても心強いことです。</p>
傑作賞	【句】筆もてば 七色おどる 美術室 作) 本田 美穂 様
	<p>【講評】「七色おどる」という言葉に作者の絵に対する純粋な情熱が伝わってきます。そして美術室という一言だけで、絵の具で汚れ、道具が散乱したテーブル、白いギリシャ彫刻像がある部屋、その中、一心不乱に絵筆を持ってキャンバスに向き合う作者・・・そんな情景まで見えてくる作品です。</p>
傑作賞	【句】学校は 強い絆の 生産地 作) 服部 恵仁 様
	<p>【講評】学校が好きな前向きな気持ち、そして絆という人間の感情を経済学でいうところの生産物にたとえるユニークなセンスを評価しました。学校生活の具体的な内容は何も描かれていないのに、学校というひとことで仲間と他愛もない会話に興じる高校生の日常風景の1コマすら浮かんできます。同じ地域、同じ年頃の仲間、大人になって時間が経つほど、実はそれが得がたい貴重なものだ気づく、まさに絆ですね。</p>
傑作賞	【句】五限目は 視界遮る 頭なし 作) 久松 瑛恋 様
	<p>【講評】教師から見れば、一抹の残念さもある内容ですが、反面、かつて学生だった昔を思い出すと仕方がないかなど、思わず苦笑してしまう内容です。そんな内容を教室の中の風景として詠むおかしさを評価しました。もちろん、教師としては、5時間目も頑張って勉強して欲しいという気持ちはあるのですが。</p>
傑作賞	【句】弟よ ペンをリングに 刺すんじゃない 作) 吉田 佳吾 様
	<p>【講評】大人から子供まであの動画に癒しを求めるほど不安が高まっている世相でもあるわけですが、それが日本のみならず言葉や文化の違う世界の人たちまで同じような思いを持っていたのか、と驚かされました。さて、この作品からでは年齢はわかりませんが、無邪気な弟さんの悪戯、それを弟よ、と優しく諭す兄、仲の良い兄弟の様子が伝わってくる、ほのぼのとした作品になっています。</p>
傑作賞	【句】勝って泣き 負けてドラマの 甲子園 作) 藤崎 智也 様
	<p>【講評】勝ち、負け、泣く・・・短い単語をうまく使い、球児たちが演じるドラマに球場、いや日本中が熱気に包まれるシーンが表現された技巧的な作品です。若者がゲームやスマホにばかり夢中になって内向きになり勝ちな昨今、大人にとっては今の若者にもそんな純粋で熱い思いが連綿と引き継がれていることに、どこかで少し安心感も感じさせる、そんな作品でもあります。</p>
傑作賞	【句】忘れ物 とりに来たけど なんだっけ 作) 山本 怜奈 様
	<p>【講評】誰にでもある日常のコミカルな経験をテーマにした作品です。簡潔な口語の表現も光っています。補足ですが、心理学的には「入口効果」(doorway effect)というものがあるそうです。つまり、人は部屋の入口を通過することで、脳が「さあ、何か新しいことを始めよう」とばかり深層心理レベルでリセットされてしまい、部屋に入る直前まで保持していた目的や記憶を消してしまう傾向があるのだそうです。</p>
傑作賞	【句】長良川 想いをのせて 継ぐバトン 作) 舘 さくら 様
	<p>【講評】川べりでリレーの練習に励む女子高生の姿が浮かんできます。「想い」という言葉が風景に溶け込んで情感溢れる作品になっています。同時に「バトン」という言葉に表現される走者たちの若い躍動感も伝わってきます。高校生活の瞬間をスナップショットで捉えながらも、そこに静と動の要素を織り込んだ秀逸な作品になっています。</p>

傑作賞	<p>【句】放課後の 夕日に映える かげぼうし 作) 菌部 桃 様</p> <p>【講評】高校生活もあとわずかとなった3年生の秋、ふと我にかえり時の流れの早さを感じる放課後の夕暮れ・・・現実でありながら心象風景のようなイメージを持つ作品です。もう半世紀以上も前の歌謡曲ですが「赤い夕陽が 校舎をそめて・・・ぼくら離ればなれになろうとも、クラス仲間はいつまでも」というフレーズを思い出しました。卒業しても、この句に込めた思いはずっと残ってゆくことでしょう。</p>
傑作賞	<p>【句】こ・き・く・くる 伸びをしながら 暗記をす 作) 松田 詩野歩 様</p> <p>【講評】文法の暗記、という無味乾燥になり勝ちな作業を川柳にしてしまう、高校生らしい発想の柔軟さ、そして技巧レベルの高さを評価しました。</p> <p>田辺須野という現代歌人が「こきくくるくれこよと釣瓶落し」という句を詠んでいます。これは「来る」という語のカ行変格活用を象徴的に用いて、時の流れの早さを「釣瓶落とし」にかけて詠んだ面白い作品です。</p> <p>一方、この作品は、全く違う主題でありながら、カ変活用を使うという斬新さにおいて共通するものがあります。ただ、田辺の作品と違い、カ変活用の後半部分「くれ、こよ」が唐突に省かれており、そのかわりに「伸びをしながら・・・」と持ってくることで、暗記に疲れた高校生が勉強を中座し、思わず伸びをする、そんな気持ちがうまく表現された、なかなか技巧的な作品となっています。</p>